

# 中国の女子専用ボクシングクラブに関する社会学的考察 —なぜ女性専用の場で「男らしい」スポーツをしているのか—

スポーツ文化研究領域

5O22A053-4 孫 安琪

研究指導教員:中澤 篤史 教授

## 【本研究の目的】

本研究の目的は、中国の女子専用ボクシングクラブに関する事情を社会学的な観点で考察することであった。さらにこの目的を達成するために、「女性専用ボクシングジムへの選択に関する要因の考察」と「女性専用ボクシングジム内の性別規範の考察」として大きく二つの部分に作業課題を設定した。

## 【第1章】

第1章では、研究の背景と問題の所在、先行研究の概観や研究方法を記載していく。

スポーツは「性的ステレオタイプのイメージを促進し、維持する」価値体系を強調し、男性性の保護区として取り扱われているが、時代の発展に伴い、「スポーツを通じて女性はエンパワーされる」という認識は、定着しつつあり、スポーツの記録や参加者数の男女格差は大幅に縮小傾向にあり、男性優位のジェンダー秩序はその正当性の根拠を失いつつあるようになる。社団法人日本フィットネス産業協会が2005年に掲載したデータによって、フィットネスクラブのすべての会員のうち、女性が過半数(53%)を占めるようになってきていることが報告されている。こうしたスポーツに関わる社会的な変化が進む中で、女性専用クラブも誕生している。Kim and Mauborgne (2005)によると、「カーブス (Curves)」などの女性専用フィットネスクラブが急成長を遂げた要因は、ブルー・オーシャンを切り開き新しい需要を生み出したためであるとの指摘もなされている。

しかし、女性専用の空間の増加は、はたして「ジェンダー化された社会秩序」への挑戦なのか、妥協なのか。男性優位が鮮明な形で表現されているスポーツの場において、女性だけの場は、女性達が自発的に占有する空間であり、その点でスポーツの場において特異な存在であり、女性たちがいかにして居場所を確保できるかという課題に答えようとするものであると考

えられる。そこで、女性だけの場が本当に女性に権力を与え、女性を支持しているのか、あるいは「男性や混合性別運動空間における覇権定義の男性気質と女性気質をコピーしているのか」という問いが浮かび上がってくる。そのため、本研究では「男性性の保護区」であるスポーツの場において「女子専用のスポーツ空間」の開拓とは、はたしていかなる意味があるのかという、問いへの回答を試みる。

先行研究の検討を行い、これまでの先行研究では「女性はなぜ男らしいスポーツに取り組み、かつなぜ女性専用空間において男らしいスポーツをやっているのか」という点や、「女子専用のフィットネス空間は女性のスポーツ参加更に女性の社会進出やエンパワーメントに対してどのような意味を持つのか」という点に答えられないことが明らかとなった。一見すると激しく危険性が高い「男らしい」スポーツ種目を対象とする研究は不十分であるといえる。それ故、本研究は、フィットネスジムにおいて激しいスポーツ種目をフィットネスとして経験する一般人参加者を研究対象にする。

最後に、研究方法としては、上海のとあるボクシングジムの会員同士に半構造化インタビューを中心に研究を進めていく。また、筆者が対象としたジムにおける実際のボクシングプロジェクトに参加し、参与観察を行う。

## 【第2章】

第2章では、会員が従来型のフィットネスクラブではなく、女子ボクシングジムを選好し入会に至る過程で影響を受けた要因に着目し、質的データ分析を用いてSP/EXID理論で検証した。また、解釈しきれないところは、自己効力感の理論を持ち合わせて論証する。結果として以下のことが明らかになった。

男女混合のボクシングジムより、女性だけの場がより「快適な技術習得環境」を提供できると指摘できる。

そして、その「快適な雰囲気」は、「より清潔、安心な客観的な環境」という外部要因と、「自己効力感が獲得しやすい女性に優しい環境」という内部要因で構成されていると考える。

また、先行研究の中に指摘された「社会的体型不安が高いから女子専用のクラブを選択する傾向がある」という結論との食い違いが指摘できる。要するに、「社会的体型不安」が高いから女子専用のジムを選択する傾向がある、女子専用のフィットネスジムを選択する人は必ずしも「社会的体型不安」が高いとわけでもないことが指摘できる。

更に、この場所がスポーツ空間であるだけでなく、一定の社交機能も果たしてい、心の帰属としてのフィットネス空間として、女性がボクシングに参加したり続けたりすることを促進しているといえる。

最後に、「女性個人のエンパワーメントから女性全体のエンパワーメントへの過程」についての深い思考を持ち、自分自身の利益を考えの出発点にするのではなく、女性全体の視点から選択を行った思考法の存在が証明された。これは、先行研究では見られなかった新たな発見となる。

### 【第3章】

第3章では、従来の性別規範に対する変容または再生産に重きを置き、インタビュー協力者達の身体ハビトゥス、筆者が参与観察で観察し得たインタビュー協力者以外の会員同士とクラブのスタッフ(コーチと経営者)の言語あるいは身体表現を考察する。結果として以下のことが明らかになった。

まず、女性がフィットネス場所や種類を選択する動機は、社会の性別規範に無意識のうちに従う状態と、意識的に抵抗する状態の二つの状態を示している。前者は、自己の身体に自信がない、または自己意識過剰の影響で、男女混合の場所に異性の視線に過度に敏感であり、自身のフィットネス実践を妨げるまで至って、やむを得ず女性専用のフィットネス施設を選ぶ状況に反映されている。後者は、より良い技術の習得のため、または女性全体の利益を推進するために女性専用の場所を選ぶ場合を指す。なぜなら、それは「自己成長や女性集団の成長」に焦点を当てており、女性の自己に対する関心や、女性が主体性を持つと表現されているからである。

また、女性のフィットネス実践は、社会的性別構造の再現であると同時に、社会的性別規範に対する抵抗と挑戦でもあり得る。会員同士は、身体的脆弱性への対抗(身体的力を積極的発揮すること、攻撃性を回避しないこと、不自然な未発達の状態な身体状態を排除すること、女らしくない逞しい筋肉を追求することなど)や、活動する主体と性的主体としての自己認識で、従来のジェンダー規範を変容させている一方、女性の特質にかかわる身体状態の好み、女性気質を「劣等的なもの」として捉える現象の存在や、フェミニズムへの認識の不足などの事実は、従来のジェンダー規範の再生産も含まれていることを示している。しかし、人間は複雑な存在であり、多くの矛盾を内包している。一人の中において、固有の性別秩序やジェンダー規範に対する反抗と同時に、その秩序への服従も観察されることもある。そのため、個々の行動に基づいて、その人を「固有の性別秩序に順応し思想的に遅れている女性」または「固有の性別秩序に抵抗し思想的に進歩している女性」と単純に分類することは、公平性を欠くと考えられる。

### 【第4章】

なぜ女性専用の場で「男らしい」スポーツをしているのかという本研究の問いに対して、現段階で女性だけのスポーツの場所は「快適な技術習得環境」と「心の帰属」として、現実的な意義を持ち、特に、激しく、危険性の高いスポーツへの女性の参加を促進するために一定の役割を果たしているためであると結論付けた。

ただし、それには限界もある。現実(ある程度で)妥協する産物である女性専用のフィットネス施設は、男性不在の場を創出することで、一部の女性に主体性を実現する可能性を提供しているが、同時に一部の女性がこの空間に過度に依存し、真の主体性を実現できなくなる可能性もある。

女性のフィットネス実践や、女性だけのフィットネス空間への選択要因は、社会的性別構造の複製や再生産であると同時に、社会的性別規範に対する抵抗と挑戦でもあり得る。どのようなフィットネス空間や方法を選択するにせよ、それは受動的な選択ではなく、能動的な思考に基づいて行うべきであると考えられる。